

VOPバイブルスクール

# 基礎講座

救いとは

6

BIBLE CORRESPONDENCE SCHOOL

第 1 課 宗教とは

第 2 課 聖書

第 3 課 聖書の神

第 4 課 人間とは

第 5 課 救い主イエス・キリスト

第 6 課 救いとは

今回学びます

第 7 課 信仰

第 8 課 祈り

第 9 課 苦しみの意味

第 10 課 十戒

第 11 課 安息日

第 12 課 死

第 13 課 世界の終末とキリストの再臨

第 14 課 教会

第 15 課 セブンスデー・アドベンチスト教会

# BIBLE

# 救いとは

# CORRESPONDENCE

# SCHOOL

## 日本人と罪意識

人類学者ルース・ベネディクトは『菊と刀』の中で「様々な文化の人類学的研究において重要なことは、恥を基調とする文化と、罪を基調とする文化を区別することである」と述べ、日本文化を恥の文化の典型として挙げています。彼女は、「真の罪の文化が内面的な罪の自覚に基づいて善行を行うのに対して、真の恥の文化は外面的強制力に基づいて善行を行う」と言っています。社会学者マックス・ウェーバーは、それを「内面的品位の原理」と「外面的品位の原理」と表現して、「キリスト教のピューリタニズム」と「儒

教」をそれぞれの代表的なものとして挙げています。

「和をもつて尊しとする」日本社会においては、まず状況への適合と秩序との調和が重要視されます。日本人にとっては、「行為が正しいか」よりも「行為がふさわしいか」が問題になります。

行為の基準は、日本では「人間対人間」という横軸で思考され、キリスト教では「神対人間」という縦軸で思考されます。

横軸の思考から日本人の状況倫理的生き方が生まれてきます。「何がふさわしいか」を基調とする生き方は、仲間主義的生き

方であり、対内的態度と対外的態度は異なってきました。仲間主義的生き方は、電車の中で会社の上司であればいくら疲れていても席を譲るのに、どんなに体の不自由なお年寄りでも赤の他人であれば知らん顔ができるのです。価値観、判断は、置かれた状況によって異なるのです。この生き方からは、状況を超え時代を超えた普遍的で一貫した生き方は生まれてきません。

精神医学者野田正彰氏は、

『戦争と罪責』という書物の中で「日本人の戦争に対する罪責感」について追求しました。彼は、この中で日本人は「傷つくことのない人間」であると結論しています。アメリカ兵や旧ソ

連兵の研究では、戦争中の自分のなした残虐行為についての罪責感から精神障害に陥る者が多かったのに対して、日本兵の場合は精神的に傷ついたケースが非常に少なかったのです。日本兵にとっては、残虐行為は自分が「した行為」というよりも「させられた行為」であり、戦争という状況が作り出した産物ではないとして、自分を正当化しているというのです。多くの日本兵には、与えられた状況の中で、自ら決断し自らの行為に責任をもって生きる姿勢が欠けていたと言えるでしょう。彼は「日本の文化には罪を感じる力は乏しい」と述べています。

明治時代、日本に來たキリス

ト教官教師たちが苦勞したのは、神と罪をいかに日本人に教えるかということでした。当時のある宣教師は「日本人は、ユダヤ人のような神観を持っていないため、罪責感を持っていない」と指摘しています。人は生まれながらの罪人であるとか、救いを必要とする者であるということが理解できませんでした。多くは、儒教的因果応報思想である「必ず信賞必罰」を信じ、自分の善行によるのではない、キリストの恵みによる救い（贖罪）ということが理解できませんでした。

そのような明治時代にキリスチャンとなった人々は、キリストという人格神の前に立って罪

人としての自分を理解したとき、初めてキリスト教の救いを理解したのでした。キリスト教界の優れた指導者であった内村鑑三は「私が生まれながらの罪人であるとは分かった時に、私は私の理性まで信じなくなりました。罪は人の体と心とを汚すにどどまりません。彼の理性までも狂わします」（『キリスト教問答』）と書いています。

キリスト教作家三浦綾子さんは、その処女作品『氷点』の中で、「原罪」という問題を日本社会に鋭く提起しました。主人公の陽子は、たび重なるお母さんのいじめにもくじけず、明るく成長していきます。ところが、彼女は自分が殺人者の娘であっ

たことを知ったとき、しかも自分の父は自分を育ててくれた「両親」の子供を殺したという衝撃的事実を知ったとき、生きる望みを失い自殺を試みたのでした。

三浦さんは、この作品をまず「陽子の遺書」から書き始めました。それが氷点のクライマックスであり原点であったからです。彼女は、陽子に次のような遺書を書かせるのです。

「今まで、どんなつらい時でも、じっと耐えることができたのは、自分は決して悪くはないのだ、自分は正しいのだ、無垢なのだという思いを支えられていたからでした。でも、殺人者の娘であると知った今、私

は私のよって立つ所を失いました。……自分の中の罪の可能性を見いだした私は、生きる望みを失いました。どんな時でもいじけることのなかった私。……けれども、いま陽子は思います。一途に精いっぱい生きて来た陽子の心にも、氷点があったのだということ。

私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は、『お前は罪人の子だ』というところにあったのです。……私はもう生きる力がなくなりました。……おとうさん、おかあさん、どうかルリ子姉さんを殺した父をおゆるし下さい。今、こう書いた瞬間、『ゆるし』という言葉にハッとするような思いでした。私は今まで、こんなに人にゆるしてほ

しいと思ったことはありませんでした。

けれども、今、ゆるしがほしいのです。おとうさまに、おかあさまに、世界のすべての人々

## 罪の赦し

新約聖書に、キリストが姦通を犯した女性の罪を赦される話が出てきます。聖書にはこう書かれています。

「朝早く、再び神殿の境内に入られると、民衆が皆、御自分のところにやって来たので、座って教え始められた。そこへ、律法学者たちやファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に

に。私の血の中を流れる罪を、ハッキリと『ゆるす』と言ってくれる権威あるものがほしいのです。……」

立たせ、イエスに言った。『先生、この女は姦通をしているときに捕まりました。こういう女は石で打ち殺せと、モーセは律法の中で命じています。ところで、あなたはどうかお考えになりますか。』イエスを試して、訴える口実を得るために、こう言ったのである」（ヨハネによる福音書八章二～六節）。

場所は神殿の境内です。民衆

が皆座ってキリストの教えを聞いている最中でした。その真ん中にこの女性を連れてきて「立たせた」のです。当時ユダヤでは、姦通罪は現行犯、すなわち現場で捕らえられた場合に限られていました。

民衆の前でキリストは窮地に追いやられてしまいました。赦せと言えば、ユダヤ人にとって重要なモーセの律法を無視したことになります。殺せと言えば、ローマの支配下にあるユダヤ人の権限外であり、ローマの権力に反逆する者として訴えられるのです。

キリストはどうされたのでしょうか。福音書は話を進めていきます。

「イエスはかがみ込み、指で地面に何か書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエスは身を起こして言われた。『あなたたちの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい。』そしてまた、身をかがめて地面に書き続けられた。これを聞いた者は、年長者から始まって、一人また一人と、立ち去ってしまい、イエスひとりと、真ん中にいた女が残った。イエスは、身を起こして言われた。『婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。』女が、『主よ、だれも』と言うと、イエスは言われた。『わたしもあなたを罪に定めない。行きなさい。これが

らは、もう罪を犯してはならない』(ヨハネによる福音書八章六―一節)。

キリストは、「罪を犯したことはない者が、まず石を投げなさい」と仰せられました。これを聞いた者たちは、一人ずつ去っていききました。「罪を犯したことがない」と主張できる者は誰もいないからです。

この物語は、キリスト教の最も本質的なもの、罪とは何か、罪の救しとは、救いとは何かを私たちに教えています。聖書は「義人はいない、ひとりもない」(ローマ人への手紙三章一〇節/口語訳聖書)と主張しています。聖書は、神の前に罪のない者はいない、すなわち、私たちは、すべて罪人であるということを述べ

今、ゆるしがほしいのです。  
 おとうさまに、おかあさまに、世界のすべての人々に。  
 私の血の中を流れる罪を、  
 ハッキリと『ゆるす』と言ってくれる  
 権威あるものがほしいのです。

ているのです。

キリストが罪の問題について語られるとき、それを表面に現れた行為の問題としてではなく、人間の根底に潜む心の問題として取り上げておられるのです。例えば、姦通の罪に関して、キリストはこう仰せになりました。

『姦淫するな』と言われていたことは、あなたがたの聞いているところである。しかし、わたしはあなたがたに言う。だれでも、情欲をいだいて女を見る者は、心の中ですでに姦淫をしたのである』（マタイによる福音書 五章二七、二八節／口語訳聖書）。

キリストは罪の問題を語られ

るとき、その本質的問題をついておられるのです。人間は元々律法を守りきれぬものではなく、罪人なのだと言われるのです。この意味において、罪を犯したことの無い者は、一人もいませんでした。一般の宗教は「行いによる救い」を説いています。それは、自分の救いは自分自身の努力で得ることができるといふものです。「天は自ら助くる者を助く」というわけです。

罪とは何でしょうか。アウグスチヌスは、罪を「どうしても赦されてはならないもの」と定義しました。聖書で言う「罪人」とは、いわゆる「犯罪人」とは違います。聖書の言う罪とは「ある行為」というより「状

態」を表します。

新約聖書では、罪を表現するのに、「的をはずす」という意味のギリシャ語である「ハマルティア」という言葉が使われています。キリスト教で言う「罪」とは、「神との正しい関係を損なっている状態」ということなのです。罪は、アダムとエバが神に反逆した結果、この地球に侵入してきました。

米国のある動物園の話です。

チンパンジー、オランウータン、ゴリラなどのいる類人猿のコーナーに、「世界で最も危険な動物」という立て札が立っている一角があります。その看板を見て、見物人たちは、さてどんな動物がいるのだろうかと興味深



そうに中を覗のぞきます。ところが中は暗くてよく見えません。じつと中を覗いていると、中に鏡が置いてあって、じつと見つめている自分の顔が見えてきます。

「世界で最も危険な動物はお前だ」という訳です。アメリカ人らしいユーモアですが、実は、私たちが自分自身の内面を吟ぎんみしてみると、自分にしか分からない罪深い自分を発見するのではないのでしょうか。

使徒パウロは、私たちの内の「罪の法則」について次のように言っています。

「わたしは、自分の内には、つまりわたしの肉には、善が住んでいないことを知っています。

善をなそうという意志はありますが、それを実行できないからです。わたしは自分の望む善は行わず、望まない悪を行っている。

もし、わたしが望まないことをしているとすれば、それをしているのは、もはやわたしではなく、わたしの中に住んでいる罪なのです。それで、善をなそうと思う自分には、いつも悪が付きまわっているという法則に気づきます。

『内なる人』としては神の律法を喜んでいますが、わたしの五体にはもう一つの法則があつて心の法則と戦い、わたしを、五体の内にある罪の法則のとりこにしているのが分かります。わたしはなんと惨みじめな人間なの

でしょう。死に定められたこの体から、だれがわたしを救ってくれるのでしょうか」（ローマの信徒への手紙七章一八～二四節）。

聖書的に表現するならば、私たち人類すべては、神の愛にそむき、神以外のものを愛し、神に対して「姦淫の罪」を犯しているのです。神よりも自分を崇あがめ、神以外のものを第一としているのです。そうであるならば、私たちはどうしてこの姦淫を犯した女性を裁くことができるのでしょうか。どうしてこの女性と私たちは無関係だと言えるのでしょうか。律法学者とフアリサイ人たちは、他人の罪には敏感びんかんであつても、自分の罪には全く鈍どん感かんでした。彼らは、自分自身を

正しいとする態度こそが、根本的罪であることを理解していませんでした。

キリスト教とは、決して聖人君子の宗教ではありません。罪人の宗教です。キリストは「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」と言われました。クリスチャンとは、罪人なのです。もっと正確に言うなら「自分が罪人であると自覚している人」なのです。私たちの現実の姿こそ、この罪を犯した女性の姿そのものなのです。

クリスチャンとは、この女性のように自分の罪深さを自覚しながら、キリストのもとにとどまる人なのです。ほかの人たち

すべてが去っていった後にも、キリストのもとにとどまるのです。寝間着姿のまま、土にまみれたままで、普段着そのままの姿でキリストのもとにとどまるのです。

そのときに、私たちは「神の大きな赦しの御手のうちに生かされている」存在であることを発見します。キリストが、私たちに罪の赦しを語られるとき、その罪のために血が流され肉が裂かれていたのです。しかし、それは、罪を犯した者の血が流され肉が裂かれていたのではありません。この赦しを語られるキリストご自身の血が流され肉が裂かれています。それが神の赦しであり十字架の出来事です。この十字架の出来事

があるからこそ、罪の赦しが語られるのです。これが福音であり、キリスト教の教える救いの出来事です。

所詮、神の前においては、人間は人間、単なる被造物にすぎません。ここにおいて、告発する律法学者たちと、告発されるキリストの立場が逆転してしまっています。なぜなら、誰一人として、神の前に自分が罪のない者であると主張できる人はいないからです。

私たちは、人を批判し人を責めます。自分自身の罪を棚に上げ、他人を譴責するのです。キリストが身をかがめて地面に何かをお書きになったとき、キリストの目に映ったのは、そのよ

うな私たち人間の姿であったに違いありません。「あなたたちの中で罪を犯したことの無い者が、まず、この女に石を投げなさい」とキリストが言われたとき、その言葉は、このような私たち一人ひとりに向かって言われた言葉だったに違いないのです。

告発する者たちが去っていき、石を投げつける者が誰もいなかったとき、彼女に対してキリストは言われます。「婦人よ、あなたたちはどこにいるのか。だれもあなたを罪に定めなかったのか。」女が、『主よ、だれも』と言うと、イエスは言われた。『わたしもあなたを罪に定めません。行きなさい。これからは、

もう罪を犯してはならない』。キリストは、この女性に罪の赦しを語られました。どうしても「赦されてはならないもの」に対する「赦し」が、ここで語られているのです。

クリスチャンとはいったいどんな存在なのでしょう。キリストは「汝らのうち罪なき者、まず石で打て」と仰せられました。この一言によって、一人、二人と人々は去っていききました。そしてこの女性だけが残されました。彼女はどうか、どうしたらよいのでしょうか。彼女は立ち去ることもできたはずですが、なぜ彼女は立ち去らなかったのでしょうか。彼女を譴責する言葉もないし、引き止める言葉もありません。

キリスト教とは、決して聖人君子の宗教ではありません。罪人の宗教です。  
クリスチャンとは、罪人なのです。  
自分の罪深さを自覚しながら、  
キリストのもとにとどまる人なのです。

ん。しかし彼女は立ち去りませんでした。彼女はその寝間着姿のまま、おそらくはだしで土にまみれた寝間着姿のまま、キリストのもとにとどまったの

## 罪人の神

『聖徒となれる悪徒』という本があります。一九一八年（大正七年）、四七歳で死刑に処せられた凶悪犯・石井藤吉の自叙伝です。

藤吉の少年時代、父の酒好きがもとで家庭は貧困のどん底に落ち、藤吉は小学校を中退させられます。やがて悪の道に走り、一九歳のとき、盗みのために初めて拘留所に入れられました。だんだんと彼の盗みの犯行はエ

です。クリスチャンとは、まさに彼女のように、自分の罪深さを理解しつつ、神のもとにとどまる人なのです。

スカレートして、四犯となり懲役刑を受けました。何回も脱獄しては捕らえられるということをしを繰り返します。

そのようなある日、彼の生活を変えてしまうような出来事が起こりました。入獄後七年、またいつものように反則を犯し、看守に注意されました。すぐに詫びればよいものを看守にくつてかかったために、看守は彼の手を後ろ手に縛り、口に猿ぐつ

わをはめ、両足が地に着くか着かないかまでにつるし上げました。それでも彼は、強情に詫びなかつたのです。

そこにちょうど、肥後という副所長が通りかかりました。彼は、その有様を見て看守を外に出し、縛り上げた縄を解き、猿ぐつわをはずしてくれました。そして藤吉が腰に下げていた手ぬぐいを取って、汗びっしょりになった彼の顔を丁寧に拭いてくれたのです。これにはさすがの藤吉もすっかり感激しました。こんな悪人にもこんなに親切にしてくれる人がいるとは、彼はありがたくてありがたくて、もう反則はしまいと心に決めたのでした。この副所長との出会いがすっかり彼を変えてしまいま

した。この副所長は、後で分かったのですが、クリスチャンだったのです。

その後、藤吉の生活態度は全く変わってしまいました。模範囚となり、規則はよく守り、喧嘩もすっかりしなくなりました。彼は所長より表彰を受け、作業賞与金をもらえるようになりました。

一九一四年（大正三年）、彼は、模範囚として一年の刑を終えて、千葉の監獄を出ました。そのとき、彼は八〇円の金を持っていたのです。ところが、東京で、大事に持っていた八〇円のうち半分以上を盗まれてしまいました。藤吉は猛烈に腹が立ちました。折角これを元手にまともになろうとしているのにと思

うと、癪にさわってたまらなかつたのです。

やがて金に困るようになった藤吉は、大阪で強盗だけではなく強姦までやり、三五円を手に入れました。翌年の一九一五年四月二十九日には横浜の鈴ヶ森で、夜道を歩いていたら若い女性を襲い三六円を奪いました。当時「鈴ヶ森のお春殺し」として世間を騒然とさせた大事件でした。その後名古屋でまた強盗強姦事件をやり、六月には横浜で強盗に入り夫婦を絞め殺して逃走し、七月には、刀屋から刀を二本盗み、豊橋で夜中の二時頃石炭問屋に入ろうとして中の様子を伺っていたところ、見回りの巡査に呼び止められました。藤吉は刀を抜いて巡査に向かった

が、巡査もひるまず飛びかかってきたので、刺し殺して逃走。

非常線を張られ、岡崎で三、四人の巡査に取り囲まれたが、一人の巡査を刺殺してまたもや逃走。

一二月に入って金に困り、東京深川で強盗に入って騒がれ、さすがの藤吉も、ついにご用となつてしまいました。

拘置所には七、八人の犯罪者がいて、いろいろな世間話をしています。あの「鈴ヶ森のお春殺し」の「犯人」、小守壮輔の裁判についても話していたのです。彼は大きな衝撃を受けました。自分が殺したのに、無実の罪を受けている人がいる。身に覚えのないことで数か月も牢獄に入れられ、裁判を受けてい

る。彼はいても立ってもいられない気がしました。小守がもし死刑の判決を受けるとなると、それこそ大変だ。自分はあるとあらゆる犯罪を重ねてきた悪人だから死刑を受けるのは当然だ。自分は本当のことを話し、罪のない小守を助けなければならぬ。

彼は、洗いざらい自分の犯した罪を告白しました。その後、彼は今までにない落ち着いた気持ちになり、死刑を覚悟したのです。

ところが、独房どくぼうに入れられ、一人きりになるといろいろな悩みや恐怖が襲ってきました。特に夜は寝付かれず、自分の犯した様々な犯行を思い出すと、恐ろしさに震え出すのでした。

そのような中で藤吉は、ミス・マクドナルドとミス・ウェストに出会うことになります。二人とも敬虔けいけんなクリスチャンで、特にミス・マクドナルドは、日本YWCA運動の生みの親として有名な方でした。彼女たちは、二度三度と面会に来ては、聖書を読むようにと勧めました。

藤吉は全然キリスト教には興味がありませんでした。しかし、独房の中で暇ひまをもて遊ぶうちに、聖書の真ん中を開けてみたり後ろを開けてみたりしているうちに、段々と聖書に引きつけられて、ルカ伝ルカ伝（ルカによる福音書）を読み始めました。

ルカ伝を読み続け、十字架の場面で、次のような言葉に出会いました。

「かくてイエス言ひたまふ『父よ、彼らを赦し給へ、その為す所を知らざればなり』……」（文語訳聖書）

このみ言葉を読んだときの気持ち、彼は「五寸釘くさきを打たれるよりもなお強く浸み込んだ」と表現しています。

彼は、五寸釘以上のものが胸に刺し込まれる強烈な痛みと共に、キリストの愛が自分自身に注がれていると感じました。こんな感動を受けたのは生まれて初めてでした。自分を殺す者に対してこんな言葉を言えるのは人間ではない。怒り、憎み恨むのが当然なのに、「彼らを赦し給え」と神に願うことは人間ではできない。神の子でなくてはできない。イエスこそは神の

子なのだと藤吉は信じました。

藤吉は、この聖書のイエスの言葉一つで神を信じたことができませんでした。彼は子供のように素直に信じたことができたのです。

しかし、彼は考え込んでしまいました。大悪・大罪を重ね、勝手わがままなことをしたあげく、最後になって急に神にすがって本当に救われるのだろうか、と真剣に考えました。しかし、彼はルカ伝一五章七節のみ言葉によって、救いに確信が与えられました。「われ汝らに告ぐ。かくのごとく悔改むる一人の罪人のためには、悔改の必要なき九十九人の正しき者にも勝りて、天に喜びあるべし」(文語訳聖書)。

彼は「懺悔録」を一生懸命に

書き始めました。自分の罪の懺悔とキリストのたいなる愛を一人でも多くの人に知らせたい。死ぬまでに自分のできることは

これだけだと、祈りながら書き続けました。少年時代から始めて、自分の犯したありとあらゆる悪事を残らずありのまま書いたのです。これは、後に『聖徒となれる悪徒』という題で出版されました。英語訳は『獄中の紳士』という題でニューヨークで出版され、さらにフランス語、ドイツ語、中国語に翻訳されて世界で広く読まれたのです。鉄格子の独房の中に閉じこめられていた藤吉は、教会に行けず礼拝にも出られませんでしたが、何の価値もない自分を救ってくださった神の救いの恵みを身に

わたしがきたのは、  
義人を招くためではなく、罪人を招くためである。

しみて感じていた藤吉の大好きな賛美歌は、

「いさおなき我を

血をもて贖あがない

イエス招きたもう

みもとに我ゆく

つみとがの汚れ

洗うによしなし

イエス潔きよめたもう

みもとに我ゆく」

というものでした。彼は歌うことはできませんでしたが、その意味をかみしめながら、いつもひとり大声でこの賛美歌を読んでいたのです。

そして、一九一八年（大正七年）八月一七日、藤吉は「名は汚しこの身は獄にはてるとも心は潔め今日は都へ」という辞

世の歌を残し、刑場の露と消えていったのです。

キリスト教とはどういう宗教なのでしょう。クリスチャンとはいったい何者なのでしょう。キリスト教とは、罪人の宗教なのです。クリスチャンとは自分が罪人であることを自覚している者なのです。

キリストは「真理はあなたたちを自由にする」（ヨハネによる福音書八章三〇―三六節）と言われました。それに対して、ユダヤ人たちは「いつ私たちは罪の奴隷どれいになったことがあるのだろうか」と問いかけました。しかし、罪を犯す者は誰でも罪の奴隷です。罪とは心の奴隷状態を指しています。私たちが罪そのものであ

るから、罪を犯すのです。罪を犯すから罪人になるのではなく、罪人だから罪を犯すのです。

キリストは「わたしがきたのは、義人を招くためではなく、罪人を招くためである」（マタイによる福音書九章一三節／口語訳聖書）と仰せられました。内村鑑三は「罪人とは、自己の罪深き者と思ひ、悔い改めて、神にその罪を赦された者のことである」と解説しています。ルターは「神は偽りの罪人を救うのではなく、真実の罪人を救うのである。だから神の恵みは、偽りの恵みではなく、真実の恵みである」と言っています。

罪人である人間は、神に罪を赦され、信仰により義とされて



初めて救いに導き入れられるのです。パウロはこう言っています。「律法が入り込んで来たのは、罪が増し加わるためでありました。しかし、罪が増したところには、恵みはなおいつそう満ちあふれました。こうして、罪が死によって支配していたように、恵みも義によって支配しつつ、わたしたちの主イエス・キリストを通して永遠の命に導くのです」(ローマの信徒への手紙五章二〇、二二節)。

「しかし、わたしたちがまだ罪人であったとき、キリストがわたしたちのために死んでくださったことにより、神はわたしたちに対する愛を示されました。それで今や、わたしたちはキリストの血によって義とされたの

ですから、キリストによって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。敵であったときでさえ、御子の死<sup>みこ</sup>によって神と和解させていただいたのであれば、和解させていただいた今は、御子の命によって救われるのはなおさらです。それだけでなく、わたしたちの主イエス・キリストによって、わたしたちは神を誇りとしています。今やこのキリストを通して和解させていただいたからです」(ローマの信徒への手紙五章八〜二二節)。



memo

## 問題

答案用紙に解答をご記入の上、郵便かFAXにてお送りください。  
郵便の場合は切手を貼ってご投函ください。

問題1 日本社会においては、何が重要視されますか？

1. 行為がふさわしいかどうか
2. 行為が正しいかどうか
3. 行為が尊いかどうか

問題2 新約聖書で罪を表すギリシャ語「ハマルティア」の意味は何ですか？

1. 石を投げる
2. 世界で最も危険
3. 的をはずす

問題3 クリスマンとはどのような人を指しますか？

1. 自分の救いを自らの努力で手にする人
2. 自分が罪人であると自覚している人
3. 自分自身を正しいとする態度の人

問題4 凶悪犯だった石井藤吉が神を信じるきっかけとなった聖書の言葉は、何ですか？

1. 「義人はいない、ひとりもない」
2. 「汝らのうち罪なき者、まず石で打て」
3. 「父よ、彼らを赦し給へ、その為す所を知らざればなり」

問題5 罪を犯した女性を赦して「わたしもあなたを罪に定めない」と言われたキリストについてどう思いますか？

VOPバイブルスクール 基礎講座 第6課 救いとは

2003年10月15日 初版第1刷発行  
2008年6月1日 初版第3刷発行  
2013年3月1日 新装版第1刷発行  
2022年3月15日 新装版第4刷発行

〒241-8501 横浜市旭区上川井町 846 045-921-1416(電話) 045-921-2319(Fax)

